

ベル君が女の子にセクハラされまくるだけの話

葵 $\alpha$

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いつものみんなよりちよつとだけスキップが過剰なダンまちの世界。

※あくまでスキップが過剰なだけなので必ずR18シーンが入るかはわかりません。(というのもこの設定だと一回じゃそういう展開に入らなそうな人もいるため)

目次

豊穰の店員	5
聖火の主神	1



「うえっ!?!神様!?!」

ベルが刺激に耐えつつ、どうにかヘスティアを起こそうと呼びかけると、ヘスティアはうるさいぞ、と。まだ起きないぞ、と主張しながら身じろぎする。しかしその行動は更にベルをピンチに追い込んだ。

「み、見えてます神様!・神様!?!」

「ん~~~~~!」

激しい運動をしたら溢れてもおかしくない程、布面積の小さいその服から、大きな胸がはみ出る。気づいたらベル自身のシャツも胸のあたりまでめくれ上がっていたので、大きく柔らかい彼女の胸は、直接腹へと押し付けられることになった。当然、健全な少年であるベルの興奮は更に増すことになる。

「はっ、あつ、こ、こんな柔らかか、じゃなくって!」

「ん~~~~~?.....んっ!」

「あっ♡」

そしてトドメだ!と言わんばかりに、今まで焦らすように陰茎の根元と陰嚢を責め続けていた指が、最も敏感な龟头へと移動する。

自分のものとは思えない声が出たベルは、しかし射精だけはなんとか我慢した。先走り汗が次から次へと出てきて、手淫の気持ち良さはどんどん増していくが、敬愛する主神をなんとしてでも汚さないように。そして、

「ぐっ、うあああああああああ!」

「んがっ!」

彼女を起こすことを諦めたベルは、レベル二の全力を持って、上下入れ替わる。

それによって手からは逃れることに成功。しかし、最後の誘惑が彼に襲いかかることになる。

ベルがいなくなったことによりソファに落ちたヘスティアは、腰を突き出すような体勢になり、ヘスティアの上に、後ろに回るのが精一杯だったベルと後背位のような形になる。

おまけに、股間の布は先程の身じろぎでずれていたのか、ヘスティアの秘部は丸見えで、当然ベルの男根は大きくなったままである。

「はっ……はっ……」

「……すー……すー……すー……」

正直、ベルは限界だった。はじめて受けるレベルの快感を、今まで最大の勃起を、ギリギリ、なんとかギリギリ耐えることができたのはひとえに、彼女が、汚してはいけない、敬愛する主神だから。

しかし今、ベルが少し腰を前に進めるだけで、挿入る。

「……ぐっ、……はっ……はあっ……」

自分以外の誰かに勃起したモノを触られたのでさえはじめてだったのだから当然、ベルには性交の経験などない。

だから今、ベルを悩ませているのは雄としての本能。バキバキに勃ったイチモツを、目の前の肉壺に押し挿れ、ぱんぱんと腰を打ち付けて、膣内をぐちやぐちやにかき混ぜる。そうすると最高に気持ちよく吐精できると、雄としての本能が言っている。

「……っはあー、っはあー……っはあー……」

「……すー、すー、すー」

頭の中の善性が、寝ている女性を襲うなんてと言えば。

悪性は、据え膳食わぬは男の恥じやと囁く。

神様を裏切ることになるぞ、と言えば。

でも、きつと神様なら許してくれる。

「……ふっ、ふっ」

ごくり。音を立てて唾を飲み込む。

結論は出た、出てしまった。頭の準備は完了した。

最後は心の準備だ。きつと一秒もせずに完了する。

だから、その瞬間。待ちきれないぞと言わんばかりにヘステイアのお尻が近づいてきたことで。

心の準備ができる前に、粘膜同士が触れ合ってしまったことで。

ベルは正気を取り戻す。

「ひっ、あっあっあ、あ、あ、あ、す、す、すいませんでしたあああああああああ!!!」

正気を取り戻したベルの行動は速かった。ヘステイアから急いで飛び退くと、勃起したまま下着を履き直し、そのままの勢いで出かける支度を始める。

「い、いつてきまあああああす!!!」

再びレベル二冒険者としての全力を用いて支度を全て終わると、目を合わせられないのか姿を見ず、言葉だけを残してホームをダツシユで出て行った……………。

\*\*\*

「……………ぐううう。あと、もーちよつとだったのに！本当にあとほんのちよつとだったのに！」

なお、ベルが去った後の部屋からは、悔しそうな声がしばらく続いていた。

「起きてるのがバレてもいいからもつとおもいつきり動くべきだったか！もー！ベルくんのヘタレーー！」

## 豊穰の店員

ヘステイアから逃げたベルは、興奮が冷めなのままホームを出たため、外で処理をするわけにもいかず、結果未だに勃起が収まらないままだった。

不幸なのか幸いなのか、若さ故の持続力と、下着を履いた時点から大きいままなので、上向きに固定することでぱつと見では異常がないようになっていいるものの、勃起したまま街中を全力疾走。変態と言われてもしようがない事をベルはしている。

「あつーベルさんー！」

「!!シ、シルさんー！」

こちらに気づいて手を振りながら声をかけるのは、いつもダンジョンに潜る際にお弁当をくれる酒場『豊穰の女主人』の店員。銀髪と可愛らしい笑顔が特徴のヒューマン、シル・フローヴァ。

「おはようございます、ベルさん。今日はとつても急いでますね？」

「す、す、すいませんシルさん！お弁当ありがとうございます！それじゃー！」

「……待って、ベルさんー！」

行つてきます！と言う前にシルに呼び止められる。できればシルに変態だと思われたくないのなるだけ早くここから立ち去りたいのだが、流石に無視するわけにはいかない。

「ど、どうしました？」

「……ベルさん。何か隠してませんか？」

そう、彼女は異常に勘が鋭い。ベルが嘘をつけない性格なのもあるが、彼女相手に隠し事は通用しない。だが本当のことを正直に言うわけにもいかず、無様な抵抗を繰り返すことになる。

「な、何かつてなんですか？」

「……特別何かあるわけじゃないですけど、何か……」

「(良かった)何も無いですつてー！」

「本当ですか？」

「本当ですー！」



苦しい抵抗ではあるが、しかし決定的な証拠があるわけではなく。なんとか切り抜けられそう、と言うところで彼女の顔が訝しげなものから真面目なものへと変わる。

「……ベルさん。無理してませんか？例えば、体調が悪いとか。……私、他人のために行動できるベルさんのこと、好きですけど……それでもやっぱり、心配なんです」

「シルさん……」

なんとということだ。僕がくだらない隠し事をしたばかりに、ここまです心配させてしまうとは。

でも、コレだけはどうしても言えない。どれだけくだらないことだろうが、心配させてしまうのは心苦しいが。

だからこちららも、出来るだけ真面目な顔で。シルさんが安心できるような声色で。精一杯返事をする。

「……シルさん。大丈夫です。本当に、なんでも無いんです。シルさんが心配するようなことじゃ、決して。約束します」

「ベルさん………あ♡」

「え？」

シルさんの顔が真面目なものから、今度は急にいたずらをしかける子供のようなものにかわった。

何故だろう。直前、視線を下げたような気がしたが。

「……ふふ♡ベルさん♡そういうことだったんですね♡」

「あ、あの、シル、さん？」

「ベルさん、どうぞこちらに♡お時間は取らせませんから♡」

「シ、シルさん!?!あの!?!シルさん!」

言いながら、手をとって路地裏へと連れ込まれる。

そう、彼女相手に隠し事は通用しないのだ。

\*\*\*

シルの手によって下着ごとズボンを下ろされると、一度衣服に引つかかったあとボロンツと弾き出されるように、大きく硬い男根が姿を

あらわす。

「……わっ、すごい。ベルさんの……おつきい♡」

「……シルさん、ダメです」

「ふー♡」

「ひゃうっ」

先程限界といってもいいところを我慢してそこからまだ射精して  
いないソレは、息を吹きかけただけでもビクンと大きく跳ねる程敏感  
になっていた。

シルは、ベルの耳元に口を近づけながら、右手でそつと優しく指を  
這わせて徐々に握っていった。そしてそのまま、優しく扱しごきながら耳  
元で囁く。

「……何がダメ、なんですか？……こんなに大きくしたまま……街中  
を走り回って私のところまで来て……ベルさんの方がよっぽど、イケ  
ナイことしてるんじゃないですか……？」

「んっ……ふっ……それは……くっ」

「それに……ベルさんが本気で抵抗したら……私なんて絶対敵わ  
ないのに……こんな路地裏までついてきたってことは……期待、  
してたんじゃないんですか？」

「……ふっ……ふっ……ふっ……ふっ」

シルの言葉責めと手扱きによって、ベルの頭の中は気持ちいいやら  
情けないやら、パニックになっていく。やがて、目に涙が浮かびそう  
になったところに今までの優しい手の動きとは一転。激しく、搾り取る  
ように強く上下に動き始めた。

「……なんて、冗談ですよベルさん。ホームにはヘステイア様がいま  
すし、ベルさんが私を傷つけて振りほどくなんてこと絶対にできませ  
んよね。ごめんなさい、ちよつと調子に乗りました♡」

「シ、シルさん！んっ、わかりましたから、手を止めてください！う  
ぐっ、シルさん!？」

「でもやっぱり、私に頼って欲しかったなあって思います。こういう  
のって、近所のお姉さんにかんしてもらったりするじゃないです  
か。……実は私、ベルさんよりちよつとだけお姉さんなんですよ？」

「シルさん!？」

「……敏感すぎてちよつと辛そうですね。……んむ……んむ、れう……」

「っあ、はっ、あっ」

ベルの反応を見て何を思ったのか、彼女は手を動かしたまま唾液を垂らした。ベルの先走りとしルの唾液が混ざり合い、ぐちゅぐちゅといやらしい音を立てながら快感が増していく。

「……ね、ベルさん……私、こつういうことするの……初めてなんです……♡上手にできてますか?……気持ち良いですか?……ベルさん♡」

……この女性はどうしてこんなにいやらしいというか、いかがわしいというか、エツチなんだろうか。すぐさま耳元で囁くのに戻ったシルを見て思う。反応を見ているのか、手は亀頭を中心に休むことなく弱点を責め立て続け、囁く声は全てベルを墮とすためのもの。

「……立っていられませんか……?大丈夫、私につかまってください……ふふ♡どこに触れてもいいんですよ……♡」

「ベルさんの耳……とつても美味しそう……♡ん、ちゅ、はあ……れる……はあ♡」

「射精ちやいそう……ですか……?……いいですよ♡だして♡射精して♡」

ラストスパートだと言わんばかりに、彼女の手の動きは更に激しくなっていく。ぐちゅぐちゅちゅちゅと先走りが濃く泡立って、細い指と手のひらに強く擦られながら陰茎がビクビクと跳ねる。

「っぐ、シルさん!でるっ!」

「はむっ」

「えっ!シルさ……!!!ぐっ!!!」

「ん~~~~♡♡♡♡♡む~~~~♡♡♡♡♡」

射精する直前、彼女はペニスの先端を啜えた。当然、噴出する精液は彼女の口内を暴れ犯す。上目遣いで見つめる目は明らかに涙を湛え、それでも最後の一滴まで吸い尽くさんと手で搾り、口で吸う。

「はあっ、はあっ、シルさん、なんで……」

「ふっ♡ふっ♡……ん、ぐ、ごく、ん。ごく」

「シルさん!？」

そして、口いっぱい溜まった白濁液を少しずつ飲み込む。涙目で、少しずつ一生懸命、自分の射精した精液を飲み込むシルの姿を見ると、思いつきり射精して満足したはずの愚息が再び反応していく。

「ん。はあ……口にする前に、おちんちんにキスしちゃいました♡」

「お、おちん……!!な、なんで飲んだりなんか……」

「酔ったお客さんが前に言ってたんです。男の人は飲むと喜ぶって。まあその人はリユーに叩き出されてましたけど……ベルさんはどうですか?ほら、あー♡」

そう言いながらシルは小さい口をできるだけ大きく開けて見せる。口の中は綺麗で、それは全て残さず飲み込んだことの証明。おまけに目を閉じて口を開ける彼女は、とても情欲を刺激する。

「そ、それは……その、とても、あの……エッチで、気持ち良かったですけど……でも」

「……ふふふ。正直ですね、ベルさん。大丈夫ですよ、ちよつと喉に引つかかる感じがしたけど……ベルさんの、美味しかったですから♡」

嗚呼、なんて淫猥なのだろう。まるで淫魔だ。このままではまた、シてもらうことになってしまう。ここにいるのはとても危険だ、というか冷静に考えてみたらここ路地裏だ。デジャヴを感じるが急いで衣服を正す。

「あつ、もう行くんですか?」

「すつ、すみません。リリとヴェルフが待っているのですつ!」

仲間のことをダシに使ったようになってしまったが、これ以上ここには遅れてしまうのも事実なので積極的に使わせてもらう。

「じゃ、じゃあ」

「行ってらっしゃい♡ベルさん、また……しましうね♡」

「は、はひ!？」

「今度はちゃんと、口にキス……させてくださいね……?」

「~~~~~!!!」

声にならない叫びをあげながらベルは逃げ走り去って行く。どうせまた明日お弁当を持っていくため、豊穰の女主人に来ることになるのだが。

\*\*\*

「…………ふふ♡からかいすぎちゃったかな？」

「アーニヤとクロエに気づかれないうちに口と手を洗わないとね。

……………本当はもっと、余韻に浸ってたいんだけど……………」